山口哲子全集

第四巻

水原秋桜子
富安風生
山口青邨
大野林火
平畑静塔
監修

山口誓子全集

第四巻
俳句集(四)

明治書院

山口誓子全集　第四巻

三八〇〇円

著者　山口誓子

昭和五十二年九月二十五日發行

發行者　明治書院　代表　三樹彰

印刷者　大日本法令印刷　代表　田中忠

發行所　株式會社　明治書院
千代田區神田錦町一―十六〈一〇一〉
電話二九四―五三三六　振替東京三―四九九一

©1977 S. Yamaguchi 0392—25304—8305　誠光社製本

山口誓子　第四巻　俳句集㈣

目次

方位　一
青銅　七九
一隅　一五五
不動　二二九
雪嶽　二九七

初出百句……三九
解題……松井利彦……三三
解説……平畑静塔……三七

方

位

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和三十一年

古梅園

さむざむと壁墨工の黒手型

電燈の煤黒寒の墨造り

寒墨を造る顔以下さらに黒し

寒造り見る醱酵のただ中に　多聞

生きものの酒ぶくぶくと寒造り

鳴門行

湧きかへる春潮船と淡路の隙

巖動かず渦潮の自在境

渦潮の底を思へば悲しさ滿つ

渦潮を兩國の岬立ちて見る

渦潮をなすと捨身のもの集ふ

渦潮よ潮ならずとも身を捨つる

強東風の鳴門わが髪飛ばばとべ

渦潮の記憶を保ちて船歸る

渦潮の衰ふるまで鵜が岩に

船跡もなし渦潮を落ちゆきて

渦潮を落ちゆく船の姿して

渦潮の中に自力でたちなほる

渦潮を觀る傍觀の隙もなし

情強(こは)きテープを春の潮に持つ*

春潮の迅(はや)き船廊鮮魚の籠

春潮迅し後甲板へ降り行きたり

さくら滿ち一片をだに放下(はうげ)せず　神戸女學院

石の椅子基督教の櫻の園

遲れ咲きいまの落花に加はらず

女教師が白(しら)背(せ)に汗のしみ負へる　蘆屋

萬綠へ女子の筋肉砲丸擲げ

田植衆憩ひて飲みも食ひもせず

吾老いず蝶の角にて輕打され

電車迅く涼しや顔のはためきて

信濃行

汽車のわが箱青木曾を過ぎ終る（木曾山中）

さまざまの形となして峡田植ゑ

藤懸る電氣起して無臭の川

胸を背に寄せて雪嶺重なりあふ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雪嶺名乗らず遠くより出で迎ふ

梯子凭せ林檎生る木に重みかけ

雄の川の雪解の上に泳へ立つ（犀川は雄にて千曲川は雌）

吾が血騒がす廣幅の雪解川

架橋行く眼にもとまらぬ雪解川

ゆるやかな千曲の側の葭雀

合流する雪解の兩つ川渡る

合ふまでは違ふ流速雪解川

雪解川合ふ間際まで千曲やさし

雪解犀川しづめられ千曲に負け

合流爲し終る新燕喜びとぶ

雪解合ひまた幾曲の千曲川

犀川の雪解の激ち渡りかへす

長野

二百萬納骨在りて嶺青む

小諸城址

手に挾み牡丹の面をまざと見る

梅雨の霧浮彫の詩を指に撫づ

小海線

柵なくて登山者驛を出で去れり

河床を驟雨通るはしばしののち

諏訪湖畔の伊東家に泊る

牡丹花にひたひた湖の寄り來たる

湖に臨みいまは固捲く縞日覆

牡丹花よ信濃の大き佛龕よ

牡丹の家佛壇の間の上に寢る

ただ湖を見るわかさぎの禁獵時

汁熱き諏訪の蜆の白肉食ふ

眞青な柿蔭山房汽車下過ぐ

芽落葉松靴の厚泥削ぎ落す（八ヶ岳）

天龍川諏訪湖より發す

すでに荒川新線の湖を出て

レールよりレール岐れて青峽へ

琵琶湖

いよいよ大鰿の水城に舟近づく

鰿は左右均齊湖の中に立つ

湖に築きて大き鰿しづもれる

鰿を別ちて鮒の穽諸子の穽

苗代にいのち噴かざる籾が見ゆ

農夫獨り何に手を拍つ春の晝

岬行

南風の中（なか）（丸善石油下津工場）火の旗のちぎれずに

低咲きの岬（潮岬）の薊大海原（おほうなばら）

暮遲し潮（うしほ）いくばくあるか知らず

夏の海見たき浪間に眼を移す

鰹釣る直立海に上下して

汽笛の禮して鰹釣る舟分けて

この舟等いまに夜焚の火をともす

太陽の出でて沒るまで青岬

吹き岐る南風燈臺の中に聞く

燈臺の光源夏のゆふ迫る

砂利を敷きつめし燈臺夏の暮

地蟲鳴く燈臺の明根つめて

同色の暮青芝の岬と海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com